



act 38
art, culture, tradition

【発行】札幌市教育文化会館

アクト第38号

July 2021

舞台監督の仕事

舞台監督

「緞帳アップ、どうぞ」。すべての舞台作品は、舞台監督の合図によって幕が上がり、スタートします。舞台監督は本番の進行を司るのはもちろんのこと、創造過程においてもさまざまな役割を担い、作品にとって欠かせない存在です。長年札幌で舞台監督として活躍し、スタッフからの信頼も厚い尾崎要さんと上田知さんに、この仕事をする上で大切なことや魅力について語っていただきました。



舞台監督の仕事

普段の公演では、決して表舞台に立つことのない舞台監督。

裏側で静かに活躍する姿にスポットライトを当てると…？

本番前の最終舞台打ち合わせ

会館舞台スタッフと舞台監督による最終打ち合わせ。

緞帳の上げ下げのタイミングや進行など最終チェック。

客席からの確認

客席後方の位置から舞台を確認し、演出家と打ち合わせ。

スタッフ打ち合わせ

進行表を見ながらスタッフと最終確認。

綱元の操作

幕や照明などが吊られたボタンを上下する綱元の作業。

教文は手動で動かします。

舞台上の清掃

撤収へ向けて、バミリの剥がし忘れなど確認しながら

舞台上をきれいに掃除。

キュー出し

転換、各セクション、役者へのキュー出し(合図)を行います。

バミリ

役者さんの立ち位置や舞台セットを置く場所に、

目印のテープを貼ります。

主に小劇場で演劇を中心に舞台監督を手がける上田 知さん、1997年から活動を始めて幅広い分野の舞台監督経験を持つ尾崎 要さん、教文ホールで舞台・照明・音響業務を委託している「ほりぞんとあーと」から舞台担当の往田 謙一さんと七尾 出さんが参加した座談会。それぞれの立場から舞台監督の仕事に迫ります。

「作品と深い関わりを持てるのが一番の魅力」

PROFILE

尾崎 要 (オザキ カネ)

2007年アクトール(株)代表取締役就任。2017年北海道文化財団アート選奨受賞、令和2年度札幌文化奨励賞受賞。

上田 知 (ウエダ サチ)

大学時代に学内や札幌市内の劇団で大道具や演出部を経験。卒業後はフリーランスの舞台監督・大道具製作として活動中。

往田 謙一 (オウタ ケンイチ)

1984年4月(株)ほりぞんとあーとに入社。2008年3月より札幌市教育文化会館の舞台担当へ配属。

七尾 出 (ナナイ オズル)

これまで大・小道具制作、CMや舞台等の現場を数多く経験。2014年(株)ほりぞんとあーとへ入社後、札幌市教育文化会館へ配属。

—舞台監督としてターニングポイントとなった現場はありますか？

尾崎 市内のダンススタジオによる合同公演「ジャズダンス・ナウ」です。2000年頃から舞台監督を任せてもらえるようになって、とても勉強になりました。舞台監督はダンサー、振付家、演出家、照明家など関わる人たちのパフォーマンスを引き上げる役割を担いますが、当時は自分の経験も足りておらず、調整をうまくできなかったりなど失敗もしながら、スタジオの先生方に育ててもらった現場です。

上田 札幌へ引っ越してきてすぐの頃に関わった「苗穂聖ロイヤル歌劇団」の公演です。そこで札幌の劇団とのつながりができて、仕事が広がっていききました。僕は小劇場での仕事が多いので、ホール公演を行う教文の演劇フェスティバルでの仕事もとても勉強になっています。

—舞台監督という仕事を一言で説明するとしたら？

尾崎 札幌だと現場によって自分の担当領域が変わってくる部分もあります。東京だと舞台監督も演劇専門、パレエ専門、コンサート専門という形が成立して、テクニカルや制作も専門の人たちが存在しますが、地方だとなかなかそうはなりません。アマチュアやセミプロの団体の場合、例えば制作がないとか、「やりたい演出はあるけれど、どのテクニカルスタッフに相談すればいいのかわからない」ということもある。地方の舞台監督はカンパニーの弱い部分をサポートする役割があって、割とそれが大変だったりします。

上田 若い劇団さんとの仕事でゴミの分別から教えることもあります。東京のカンパニーの札幌公演で舞台監督をしたときと同じ感じで分別していたら、「東京の舞台監督さんは絶対そういうことしないでしょ」って言われました(笑)。あと作品づくりの部分は演出家や役者が責任を負いつつ、いざ幕が上がってからの現場の最終的な責任は舞台監督が負いますね。劇

場に入ってから現場責任者が舞台監督ということになるのかな。

—劇場入り後はさまざまなセクションの人がより良いパフォーマンスを発揮すべく準備に時間を使いたいわけですが、調整の場面では演出家の希望が優先されますか？

尾崎 演出家がこだわって「ここを仕上げたい」という場合も当然ありますが、時には「作品全体を良くするためには、先にこちらをやらないと最終的な仕上がりと完成しませんよ」ということを僕は言わないといけないですよね。各セクションの利害がぶつかる場面はありますが、開演時間から逆算してやらなければならないことの順番と時間配分を調整していきます。

上田 (隣で激しく同意)

往田 僕らも大道具として働いていた時期がありますが、スタッフは道を一つにするために舞台監督の命令しか聞かないです。演出家や役者が何か言ってきたら「ごめん、それは一度舞台監督に話をして」って言いますね。

七尾 ずっとできるとなったら延々とやりたい人たちだから、お金や時間、スタッフのことも考えながら交通整理していくのは舞台監督の仕事ですよね。なので、一番責任を負っているとは思いますが。下からは突き上げられ、上からは叩かれ、ちょっと厳しい立場…

上田・尾崎 中間管理職ですよ(笑)。

—舞台監督をする上で、ジャンルへの理解は不可欠でしょうか？

尾崎 難しい質問ですね。僕は日本舞踊の舞台監督もしますが、日本舞踊の知識をすごく持っているわけではないです…演劇やパレエに対しても演出家と同じくらいの知識を入れるのは物理的に難しい。ただ、それぞれの基本的な共通言語は身に付ける必要があると思います。

—多種多様な発表が行われる教文ホールのお二人の場合はどうですか？

七尾 共通言語のような知識的なことは聞いたり経験したりする中で身につけてきたと思いますが、やはり僕たちが最初に考えないといけないのは安全管理です。舞台監督が不在で、お客さんは上手も下手もわからないという現場なら丁寧な説明が必要ですし。安全面での決まり事も増えてきているので、注意しながらやっています。

往田 アマチュア団体さんの公演が多く、プロの業者さんなら当然共有している常識をお客さんが知らない場合もあります。最初の頃はそれに戸惑いましたが、今は舞台の数だけ常識があるという考えに変わりました。危険がない限りは、発表される方々の常識に沿うように心がけています。

—演出家の希望と安全管理をする劇場側の意見が対立したときはどうしますか？

尾崎 なるべく冷静に話し合うことが大切です。消防法では問題ないけれど、劇場独自のルールによって禁止されているようなケースだと、演出家が納得できない場合もある。劇場側には安全管理、演出家には創意工夫の視点があって、大体はお互いに守らなければいけない領域が違うために認識の違いが出てきているだけなので、そこは話し合いながらお互いに納得できる着地点を見出して、最終的に本番へ持っていくようにします。

上田 劇場にはもちろん場合によっては消防署なりなんなり、とりあえず聞きに行って、それを元に話し合うという。舞台監督はいろいろな人と話さないといけないので、僕自身決してそれが得意なわけではないですけど、でもコミュニケーションはとても大切にしています。あと現場で起きていることをなるべく俯瞰で見ることも大事ですよ。

尾崎 そうですね。自分の感情や意見をぐっと押し込んで、他人の視点に立って客観的に物事を見る

ことが必要とされているなと思います。

—先ほど中間管理職という言葉も出ましたが、それでも舞台監督を続けてきた魅力とは？

上田 作品の立ち上げから完成までずっと立ち会って見ていけて、自分の思いを話し合いながら入れ込んだりもできる。一から作品に携わり、本番では進行も担って深い関わりを持てるのが一番の魅力だと思います。

尾崎 面白い作品づくりに関わられたときはやりがいがありますし、終わってお客さんの拍手が鳴り止まないときは、やっぱり「よし！」って思いますよね。僕はカーテンコールを4回目まで出したことがあります。あの拍手と一緒に帰ったスタッフとして快感ですよ。

—カーテンコールは観客と舞台監督のコミュニケーションの場面かもしれないですね。

上田 「もう一回行けるかな？」って一瞬迷って「よし！行っちゃえ！」と出した瞬間に、スッと拍手が止んだりとか(笑)。初日のカーテンコールが終わって役者がはけてきたとき、「幕が開いた」という達成感があります。

—地震やコロナのことも考えると、滞りなく幕が開いて終わるとするのはすごいことなのだと思います。

尾崎 お客さんにとっては当たり前なことなんですけどね。その当たり前のことを当たり前にするのが大変だったりしますね。

往田 舞台監督は、舞台がうまくいっても誰も褒めてくれないけれど、失敗したら真っ先に言われる立場ですからね(笑)。

—舞台作品はこうやって観客のところへ届けられるのだということがわかりました。ありがとうございました！

舞台監督の仕事の流れ

今回は演劇における舞台監督の主な仕事の流れをご紹介します。最初の段階で台本が完成している理想的なパターンを想定して教えていただきました。

作品の立ち上げ～稽古期間

打ち合わせや進行表作成

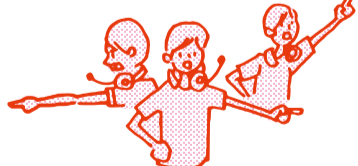
演出家や劇作家との台本確認に始まり、美術、照明、音響等のテクニカル面、制作との予算関係、劇場などさまざまな打ち合わせを行う。稽古では転換等の段取りを確認し、進行表を作成。



劇場入り後

進行管理

搬入や仕込み中の照明、音響、大道具などの作業の指示、リハーサル等の段取りを行う。スケジュール通りにいかない場合など、各セクションの利害調整を図り、順番と時間配分を決定する。



本番前

開場と開演

開場前の最終確認をし、開場のキュー(合図)を出す。開場中は制作スタッフとやり取りしながら開演時間の最終的な判断をし、各セクションへ伝達。開演キューを出して本番がスタート。



本番中

キュー(合図)出しやトラブル対応

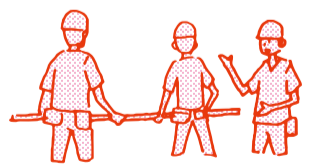
転換、各セクション、役者へのキュー出しを行う。衣装が破れたり小道具が壊れたりした場合は舞台袖で応急処置をするなど、突発的に起こるさまざまなトラブルに対応。



本番終了後(公演最終日)

バラシ、搬出の進行管理

「幕が降りたら、あとはもう時間との勝負で余韻もへたくれもない(by 上田)」。退館までの撤収スケジュールを調整・進行。最後に原状復帰がなされているか確認し、劇場さんへお返しして終了。



KYOBUN WORKS

お二人が舞台監督をされた教文の事業をピックアップ!

教文演劇フェスティバル

舞台監督：上田 知

2008年から担当。短編演劇祭では複数の出場団体のリハーサルまでを制限時間内に行うため、各団体からの要望を元にテクニカルと打ち合わせ、削ぎ落としたり提案したりといったやり取りを重ねる。「初めての団体との仕事で経験値も増やせましたし、市外・道外の団体との交流も良い刺激になります」。



写真：折田写真

高校生演劇ワークショップ+発表公演「転校生」(2016年)

舞台監督：尾崎 要

美術や照明に加えて、映像を効果的に使用した作品。スクリーンではなく舞台美術へ映像を投影するにあたり、美術や映像作家との打ち合わせや現場での映像調整に時間をかけたそう。「出演者が高校生ということもあり、静かな作品の中に秘められたエネルギーがものすごく、非常に良い作品でした」。

